

〔関連資料1〕

京都速記研究所機関誌「速記研究」第69号（昭和5年9月8日発行）の「比較速記法」において

助詞法

5. 中根式

単に助詞法のみならず、**中根式**は現在**3派**に分かれている。即ち**第1**は**創案当時の形**を保っているもの（応用速記術の秘訣所載*本山桂川）**第2**が中根正世氏の新日本速記学会、現在では**中根速記学院の一派**（通俗中根式速記法所載）及び**京都速記研究所の一派**（中根式速記術通信講座並びに研究会報上発表）であって、字形についての根本的な差異はないが、この三者はいろいろの点に特色がある。しかしながらここに紹介するのは通俗中根式速記法所載の助詞法を中心として、他の二者はただ参考に引用するに止める。（中略）

これが創案当時のものと、**研究所派**のものと比較すると次のようになる。便宜上、通俗中根式の方を通俗、応用速記術の方を応用、研究所の方を研究と名づける。（表は省略）

上の表によって応用の方は中根式の原形で、次に通俗の方に発展し、さらに研究の方になった（後略）

と分派について暗に書かれております。昭和5年5月27日には「中根速記学院」から「中根速記学校」と改称しております。

〔関連資料1-2〕

京都速記研究所機関誌「速記研究」第72号（昭和5年12月15日発行）には「京都速記研究所」の支部所在地が掲載されております。

松江速記研究所

島根県松江市北堀町 主任 和田 新

大阪速記研究所

大阪市住吉区聖天下2丁目40 主任 赤坂 薫

長野速記研究所

長野県諏訪郡岡谷 主任 林 経義

湘南速記研究所

神奈川県横須賀市安浦町2丁目 主任 浜田喜一

* 京都速記研究所は、森卓明が大正13年に設立されております。

中根式関係者の間でも**和田 新**、**林 経義**の両氏が**森卓明門下**であることは以外に知られておりません。

〔関連資料2〕

森卓明著：超中根式速記法の「序」で

中根式速記法の発明は、大正3年5月10日大阪毎日新聞によって江湖に紹介せられた、すなわち同新聞には「新案出の速記術、大学生の発明」と題して次のごとく記載せられてある。

(＊新聞記事は省略)

発明者中根正親氏はその後速記とは全く縁を絶ち現在その創立にかかる京都両洋中学長*1として専ら育英に努めておられる。しこうして中根式の普及宣伝にはその令弟中根正世氏が専らその任に当たり、現に東京府認可中根速記学校長として速記者養成に従事さるる傍ら、速記国字論の立場から常に全国にわたり速記講演行脚にほとんど席温まるいとまもないありさまである。なお氏の著書中根式唯一の単行本「通俗中根式速記法」(昭和2年11月発行)はかしこくも、天覧、台覧の栄に浴しているのである。

私は大正8年8月22日より6日間毎夜7時半より2時間ずつ、初日は京都基督教青年会館、第2日目からは聖護院京都速記学校において、第4回中根式速記法講習会のあった節、発案者中根正親氏の講習を受けたのである。自来主として独学で速記の学と術との研究を重ね、時々中根正世氏のご教授にあずかりつつ、3年の後どうやら速記の実務につき得るまでになったのである。私はなお一層速記学の研究の必要を感じ、大正13年の秋京都速記研究所を開き内外の速記方式の研究を始めると同時に希望者に中根式速記法を教授し、さらに同14年1月月刊雑誌「速記研究」を発行し、速記に関するあらゆる研究報道をなしつつ今日に及んでいるのである。

原始中根式*2の面影を知るためには大正5年2月中根正親氏講述の「中根式速記法講解」*3なる謄写刷3冊の著書があるだけであるが、これは既に希書に属するので容易に手にすることはおろか一覽することもかえって困難であろう。同書に「何をか中根式と称する」という問題が取り扱われてあるからここに要点を摘録してみる。

拙式はその立案そのものを中根式と称したいと思う、今後の研究者は第1立案、第2何派を取るべきかということをして先に研究決定をしなくてはならぬ」(12ページ)

これによると立案そのものが中根式であるというのであるが、しからば中根式の立案 とはいかなるものか。

「日本語は口語体文章体とも漢字の活字と助詞的仮名活字とをもってあらわすことができるといえる。これが余の立案中の骨組みである」(8ペー

ジ)

これによると、漢字の短縮法と仮名の短縮法とをもってその立案とするということがわかる。漢字に音と訓とがある。音はいかに短縮するか、訓はいかに短縮するか。仮名には助詞類と助動詞類がある、これをいかに短縮するか。その立案を満足する方法として同書12ページに15カ条の特徴が挙げてある。

すなわち

1. 「インツクキ」の書き方
1. 長拗音の書き方
1. 50音図本画の特殊選定（特にサ行、ハ行、タ行）
1. 「インツクキ」組み合わせ法
1. 「長拗・インツクキ」組み合わせ法
1. 長拗法
1. 助詞の書き方
1. 助動詞の書き方（下段使用）
1. 口語助動詞、動詞の書き方
1. 訓読転化法（上段使用）
1. 第一種線及び第四種線の活用
1. ラ行短縮法
1. 助動詞の連続、助動詞と助詞の連続
1. 同行「インツクキ」組み合わせ法
1. 成句省略法その他

以上15カ条の特徴の中インツクキ法及び長拗法は漢字の音の書き方である。これは実に我が国速記界空前の大発明で邦語速記史上中根正親氏の功は実に偉大なものである。ところが同じ漢字でもその訓をあらわすのに「訓読転化法」というのを用いる、すなわち

「訓読は音読で書いて反訳の際は訓で読むのである。例えば甚だをハナハダと書かねばならぬときには音読でジンと書き反訳の節これをハナハダと読むのである。云々」（9ページ）

しこうしてこれに対して著者はみずから「これはすこぶる融通応用が利くものである、

しこうして同一音で3字あるいは4字ないし6字の同音異義をあらわし得られる、これは我が国最初の試みであって、しかも余はこれまで多くの有識者をしてたちまち矛を折らしめたる得意の立証を有している」（9ページ）と言っているところから見れば中根式立案の重要な部分を占めていることがわかる。

しからは、**中根正世氏の「中根式」はいかに変わっているか**。大体において原始中根式の踏襲である。原始中根式中加点インツクキ法、ラ行短縮法の廃止、助詞中2～3の改良、口語助動詞・助動詞の下段使用によりさらに加点法に進めた点、**第四種線の活用範囲拡張等が重なる特徴**で、なかんずくその最も特徴とするところは「国字の改善は一日も速やかならざるべからず、簡易速記文字の普及は一日を後るるべからず」という速記国字論に立脚し、「文字のために支配されてそのドレイとなるなかれ！ 文字を支配して、その征服者たれ！」という主張のもとに、第一、学生の筆記難救済のために速記文字を普及するという、一種の宗教的熱情をもって東奔西走、自己の信念を満天下に訴えている点である。

さて本書の立場は、私の現在までの研究の総決算であり、私の速記方式に対する理想の一部の具体的表現である。なお中根式速記法創案以来の発達進化の跡を明らかにするため、ところどころにその由来を付記しておいた。私は今なお方式の研究をやめない、今現にさらに高次の縮字法について研究中である。由来、速記方式が科学的であるためには略記法なるものは全廃すべきである。しかし、略記法にまさるとも劣らざる縮字法の発見されない限りにわかにこれを廃することはできない。本書にはまだわずかではあるが略記法が残っている。さらに略記法全廃、縮字法をもって首尾一貫、科学的に組織されたる速記法として、諸君に見えることも余り遠きことではあるまい。

本書に発表する方式は**中根式基本文字、中根式の特徴たる逆記インツクキ法、助詞法の基礎を寸毫も変更せず、すなわち中根式を基礎としてさらにその上に中根式の表音速記法として不備な訓読転化法を全廃し、四種線略字を極度に制限し、新たに「和語縮字法」「外国語縮字法」を創定し、なお速記文字使用の数字方式を制定した、しかもこれらは全部逆記法の発展であって**反中根式でも、外中根式でもない、これすなわち**超中根式と称する****ゆえんである。**

(後略)

と書かれております。

* 1 森卓明が「**原始中根式**」という表現をしておりますが、創案後17年間で「原始中根式」と呼ぶには早すぎます。

* 2 現在の両洋学園（京都市中京区三条西大路、高等学校）

* 3 「中根式速記法講解」は昭和56年4月に兼子次生（つぐお）さんが和文タイプによって復刻版を発行しております。**通信教育の教科書**です。

【関連資料3】

西来路秀男著「短期速習 速記入門ハンドブック」（昭和30年11月発行、ハンドブック

ク社刊) の67ページに“各式の養成機関”の中に

大阪速記研究所〈大阪市住吉区内粉浜東之町1の40〉**中根式森派**。瀬戸豊氏指導。教室(福島区上福島南2丁目177 福泉寺内)月、水、金(夜間)。と書かれております。「**中根式〇〇派**」と表現している古い文献です。

〔関連資料4〕

中根速記協会：季刊ステノ 速記研究誌 1 (昭和32年8月4日発行) の14ページに「補遺速記教室」で捨野愚良夫さんが

協会本部の池田さん(*1)から原稿が、締め切ったあとで届いた。

一応正統中根式の書法を知る上で、また34ページから38ページにわたって掲げた地方各氏の符号との比較の点でも興味あると思われるので、特に編集者に頼んでこのページに組み込んでもらった。

池田さんの符号は川村さん(*2)とよく似ている。川村さんも現在の池田さんと同様かつて九段の速記学校(*3)で指導されたことがあるので、このお2人の符号が似てくるのは、やはり**九段流**なる、目に見えぬ1つの規範に作用されるのだろうか。今回の速記教室で取り上げた文例のうちで、池田さんののが最も基本的な書体であるのも、中央で協会幹部として指導する責任ある立場上、自然とそうならざるを得ないのかもしれない。

私の知る池田さんは、なかなかの研究熱心な人で、私ら若いころにはよく議論をしたものだ。私と同じように、ロマンスグレーと呼ばれるようになったこのごろでもこの年になるまでに得た尊い経験をもとにしてお互いに昔のように大いに研究に努めようではないか。

(後略)

と書かれております。

*1 池田正一

*2 川村秀蔵(明治41年10月 日～平成4年8月4日)

昭和14年10月～昭和20年4月まで東京・中根速記学校教師。昭和31年11月20日、青森県弘前市に川村速記学校を設立しました。

*3 中根速記学校

当時、中根式では東京・九段下の「中根速記学校」のほかに、青森県弘前市大富町1-13に「川村速記学校」(現在廃校・川村秀蔵)、岩手県盛岡市志家3-43に「岩手速記学院」(現在廃校・加茂秀雄)があり、九段の速記学校と言えば中根速記学校のことを指しております。

*加茂秀雄(明治26年12月 日～昭和52年6月19日)

捨野愚良夫が「九段流」という表現をしております。季刊ステノは中根速記協会香川県支部で編集をしております。

捨野愚良夫はステノグラフ、荘戸繁土はショートハンド、鈍木朋定はドンキホーテと読みますが、植田裕のペンネームです。

参考までに、滝鞍二はタキグラフィーと読むペンネームも存在しております。